

連携医院のご紹介

今回は、患者さんに優しい病院「耳鼻科の町医者」を志しておられる西区の『二階堂耳鼻咽喉科』の二階堂 真史 先生です。



二階堂院長

二階堂耳鼻咽喉科

〒733-0002
広島市西区楠木町4丁目16-18
電話/082-237-2123
院長/二階堂 真史
診療科目/耳鼻咽喉科、アレルギー科



二階堂耳鼻咽喉科外観



待合室



シンボルマーク

○いつ開業されましたか。

山口大学を卒業後、広島大学耳鼻咽喉科学教室に入局しました。その後、尾道総合病院、麻田総合病院(丸亀市)、JR 広島鉄道病院で勤務医として、多くの患者さんの治療に携わってきました。

特に鉄道病院では、9年間という長い勤務になったため一つの病院に長く勤務することにより患者さんとの距離が縮まり、患者さんにとって身近な医師として仕事をすることの大切さを実感しました。そのような中、同門の先生の御紹介もあり、平成16年に西区三篠の複合ビル内に開業いたしました。

○開業されてから今までのことを教えてください。

最初の開業場所では、診療面は順調でしたが、待合室が狭く、冬は寒い、国道(可部街道)から車の出入れが難しい、駐車場のスペースが狭いなど、いくつかの問題点もありました。

そこで将来的なことも考えて、平成25年に思い切って同じ西区内の楠木町に新築・移転しました。新医院の整備にあたっては、待合室は明るく清潔感があること、できるだけ待ち時間の苦痛を少なくするために本棚を広く取ること、子供さんがたくさん来られるのでキッズスペースを作ること、駐車場は使いやすく十分なスペースがあることを課題として建築士と話し合いを重ねました。

移転して5年目になりますが、前述の課題はおおむね解決できたと思います。

○毎日の診療で大切にされていることは何ですか？

診療に当たっては、何でも相談していただける「耳鼻科の町医者」であるように患者さんの立場になって考え、気持ちを理解することに努めています。診察結果や必要とされる検査とその結果、治療内容を分かりやすく説明することを心掛けています。また、子供の恐怖心をやわらげるために、子供の目線になって優しい態度で接すること、出来るだけ痛くないように気を付けて診察すること、最後には「よくがんばったね」等の声掛けにも努めています。

それらのことにより、診察後に、小さい子供が笑顔でバイバイして帰っていくのを見ると癒され、やりがいにもつながっています。

○県病院はどんなところですか。

福島先生をはじめとした諸先生方には、大変お世話になっております。西区からは少し遠方になりますが、患者さんが近日中の手術を希望する場合や日帰り手術の場合でも、県病院は迅速に対応していただけるので、有難く感じています。また、紹介状の返書も診断・治療結果について丁寧に作成していただいておりますので、その後の治療に大変役立っているばかりでなく、私自身の勉強にもなっています。

【取材後記】

白を基調とした外観に加え、内装が暖色系(オレンジ・グリーン)の落ち着いた配色により、明るく落ち着いた雰囲気の医院でした。また、院長先生が自ら考案されたシンボルマークにもその配色が反映されるなど、医院運営に一貫したポリシーを感じることができました。

もみじ



県立広島病院 〒734-8530 広島市南区宇品神田1丁目5番54号

※県立広島病院の様々な情報をホームページへ掲載しています。
県立広島病院 で検索 (URL: <http://www.hph.pref.hiroshima.jp/>)



理念：県民の皆様にあわれ信頼される病院をめざします

ドクターカー運用開始！！



救急科スタッフと木矢院長



救急現場へ医師が直行！！

運行時間 平日 8:30 ~ 17:15
(H30年度) (土・日・祝日・年末年始を除く)

当院は救急医療の中核病院として、今まで以上に地域医療に貢献し、救急患者さんの生命を守ることを目的として2018年7月2日からドクターカー(ラピッドカータイプ)の運用を開始しました。

ドクターカーは消防署、救急隊や医療機関からの要請により出動し、患者さんのおられる事故現場や病院、救急車との合流地点まで緊急走行し、一刻も早い治療を行います。

Q. ドクターカーとは？

医師、看護師など医療スタッフが乗り込んで、患者さんの診療に向かうための車両のことです。

Q. ラピッドカータイプのドクターカーとは？

患者さんの搬送機能を持たない救急車です。患者さんと医療スタッフが合流した後は、医療スタッフが消防署の救急車へ同乗し、病院へ搬送します。

Q. ドクターカー運用の目的は？

重症度が高かったり、緊急度が高い救急患者さんの場合、救急医・救急専門の看護師が現場に出動して一刻も早く治療を開始することで、救命率が向上することや後遺症が軽くなることが期待できます。病院で患者さんが救急車で来るのを待つ通常の救急医療ではなく、病院の外に救急医・救急専門の看護師が出て行き治療開始のタイミングを早める、いわゆる「攻めの救急医療」を実践することが、ドクターカー運用の目的です。

Q. ドクターカーの対象となるのは？

気道・呼吸・循環・意識に危機を及ぼすことが予想される外傷、疾病です。重症外傷、急性冠症候群、脳卒中、呼吸不全、熱中症、アナフィラキシーショックなどです。消防署もしくは救急隊から要請があれば、心肺停止の症例にも出動します。

Q. 当院ドクターカーの特徴とは？

救急医だけでなく新生児科医も使用するの大きな特徴です。NICU(新生児集中治療室)での治療を必要とする赤ちゃんに対して、新生児科医が搬送用保育器と資機材をドクターカーに乗せて赤ちゃんが居る病院まで「お迎え」に出動し、適切な医療介入をしたのち消防署の救急車で赤ちゃんを搬送します。救急医と新生児科医が共用するラピッドカータイプのドクターカーは全国初です。

Q. 通常の救急車で搬送と違いは？

消防署の救急車は救急隊員が乗務しています。その中には救急救命士の資格を持った救急隊員もいます。救急救命士の可能な医療処置は徐々に拡大されていますが、それでも医師だけが可能な処置や治療がたくさんあります。医師が可能な処置や治療を当院到着前に現場で行わないと救命できない患者さんがいます。救急隊員のみと一緒に活動し、医師にしかできない治療を始めることで救命率を上げることができ、後遺症を軽減することができます。

「攻めの救急医療」に
皆様のご理解とご協力を
よろしく願います！



救急科 部長
伊関 正彦

県立広島病院からのお知らせ

8月のがんサロン

- 開催日 平成30年 8月 8日(水)
- 時間 14:00~15:30
- 場所 新東棟2階 総合研修室
- テーマ 『知って納得！乳がん』
- 講師 乳腺外科部長/松浦 一生
- 対象 悪性腫瘍(がん)の患者さん 及び
そのご家族
- 問合せ先 当院での受診歴は問いません
がん相談支援センター
☎082-256-3561 (担当/橋本)

H30年度 がん等の診療に携わる医師等に対する 緩和ケア研修会

- 開催日 平成30年 9月 2日(日)
- 時間 8:30 ~ 17:05
- 場所 中央棟 2階 講堂
- 担当者 主催責任者 院長 / 木矢 克造
企画責任者 緩和ケア科 主任部長 / 小原 弘之
協力者 広島市民病院 精神科部長 / 倉田 明子
広島市民病院 緩和ケア科 副部長 / 岡部 智行
中谷外科医院 副院長 / 中谷 玉樹 ほか
- 対象 がん医療に従事する医師等
- 定員 30名(定員に達し次第、募集を締め切ります)
- お申込み
お問合せ 詳しくは当院HPに掲載しています。
<http://www.hph.pref.hiroshima.jp/event/kanwakea.html>

フレイルとメタボ

妻が以前から通っているフィットネスクラブに、最近おじさんが増えたそうです。エアロビクスとかヨガなどをやっているようですが、相当ハードなエクササイズだそうで、妻がたまに行くと、あちこちが痛くなって動けなくなるくらいだそうです。毎日来ているというおじさん達も多く、平日昼間にしっかりと運動できるのは定年後の特権かもしれません。しかし、いくら時間があるからと言っても、歳をとってから運動を継続するのは簡単なことではありません。

私も1年前までは、病院の階段を5階までは歩いて上がっていましたが、今はせいぜい3階までで、エレベーターの誘惑に勝てません。フィットネスクラブに足しげく通うおじさんたちの目標は、暇つぶしではなく、当然体力の増強・維持だと思います。ただし、わが妻の「定年後毎日家におられたらかなわん」という言葉もわからないではありません。おそらく、奥さんからの脅迫的な勧めもあって足繁く通うことになった人もいられるでしょう。

最近、フレイルという言葉をよく耳にします。いわゆる“虚弱”と言われる状態です。歳をとると筋肉が弱ってきて、瞬発力も持続力もなくなってきます。先日あった講演で聞いたのですが、毎年筋肉の量は1%ずつ減ってくるそうです。そして、中年の象徴であるお腹ポッコリのメタボの状態から歳をとっていくと筋肉量がどんどん減っていくそうです。比較的若い医師でさえも、病院のなかで普通に歩いていてつまずくのをよく見かけます。もちろん還暦を過ぎた私も例外ではありません。歩くときに足がしっかり上がっていないから、すなわち足の筋力が落ちてきている証拠です。もちろん歩いていてつまずく状態をフレイルとは言いませんが、今、フレイルは要支援、要介護の危険性の高い状態として社会的にも大変注目されています。

さて、どのような状態ならフレイルというの

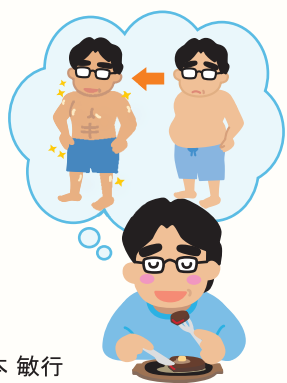
でしょうか？①ダイエットをしているわけではないのに半年間に2～3kg以上体重が減る。②わけもなく疲れた感じがある。③活動量の低下、たとえば散歩などの運動を週1回以上していない。④歩くのが遅い、たとえば青信号で横断歩道を渡りきれない。⑤握力の低下、たとえばペットボトルのキャップを開けにくい。

この5つの項目のうち3項目以上該当する場合にはフレイルと診断されます。幸い私はいずれも該当しません。ただし、横断歩道を渡るのは問題ありませんが、同世代の人よりも歩くのが遅いというのが普段から気にはなっていますが、おそらく足が短いせいだと納得しています。

さて、ではどうすればよいのでしょうか？前述した先日の講演会で聞いた話です。中年のメタボ（私もそこに入ります）は、運動だけでは解決しないそうです。必ずカロリー制限（糖質制限も含む）が必要だそうです。何とかザップというCMをテレビでよく目にしますが、厳しいカロリー制限が大前提で、運動はおまけです。運動はダイエットにはほとんど役に立たないようですが、「健康」、ある種のがんの予防に有効であることは証明されています。一方、高齢者のフレイルは、食事制限をしない事、好きなものを食べる、肉を食べる、もちろん魚も良い、とにかくしっかりとたんぱく質を摂ること、だそうです。健康のために運動するのではなく、運動できるような身体を維持するためにしっかり食べることが大事だそうです。

還暦を過ぎたばかりの私は、まだ高齢者ではないのでカロリー制限（糖質制限）に舵を切ること決意しましたが、最も困難なミッションであることは間違いありません。

副院長（消化器センター長）板本 敏行



ご利用ください!!

がん相談支援センター がん専門医よろず相談所



当院は、国からがん診療連携拠点病院に指定されています。がん診療連携拠点病院とは、治療の内容や設備、がんに関する情報提供などについて一定の基準を満たしている施設で、質の高いがん医療の提供と患者さんを支えるための様々な体制を整えています。その一つに、「がん相談支援センター」があります。このセンターでは、がん相談員（看護師・社会福祉士）が、がんに関する不安や悩み、疑問などについて、解決する方法を一緒に考え、がんに関するパンフレットも常備し、必要な情報提供を行っています。

今年度からは、「がん治療と仕事の両立相談」の取り組みを開始しました。がんと診断された方の三分の一が勤労者であるといわれています。治療を受けながら仕事を継続する方法を共に考え、支援していきたいと考えています。

また、当院では平成26年から「がん専門医よろず相談所」を開設しています。病気についてもっと詳しく知りたい、セカンドオピニオンに行くほどでもないが、主治医以外の医師の意見も聞いてみたいなど、医師が無料で相談に応じています。開設から平成30年6月現在まで、のべ658名の方が利用されており、「自分の考えを整理するヒントになった。」「自分が日々不安に思うことや病状に関する疑問について、丁寧に分かりやすく答えてもらった。」といった感想を頂いています。がん相談支援センター、がん専門医よろず相談所は、当院の患者さんに限らず、地域の方にもご利用いただけます。是非、ご活用ください。



がん治療と仕事の両立相談の一例



脳心臓血管カンファレンス

【循環器内科／政田 賢治】
 脳心臓血管センター長／上田 浩徳

心エコー図検査といえば、安静に経胸壁から行う安静時の心エコー図検査が一般的ですが、2012年から負荷（運動負荷と薬物負荷）心エコー図検査が保険診療で認められました。適応疾患は①冠動脈疾患②弁膜症③肥大型心筋症④拡張型心筋症⑤肺高血圧です。特に狭心症や陳旧性心筋梗塞患者における冠動脈狭窄の診断と心筋バイアビリティーの評価での本検査の有用性はClass Iで、心筋虚血を負荷心電図の心電図変化よりも負荷早期に捉えることが可能とされています。冠動脈疾患における負荷心エコー図検査は運動負荷より薬物負荷（ドブタミン等）の方が適しているとされています。その他、弁膜症に

おける臨床症状とエコー所見の乖離がある場合に負荷することでの重症度の評価や運動負荷誘発性肺高血圧・膠原病関連肺高血圧の早期診断をすることが可能です。

しかし、実施には少し手間がかかるなどの理由もあり本邦での負荷心エコー図検査の実施率は心エコー図検査の約1.2%と低いのが現状です。今年度から、経皮的冠動脈形成術の保険適応に心筋虚血の評価が重要視されたことから、今後、心筋虚血評価のモダリティの一つとして活躍していく検査と考えます。当院でも実施可能です。



平成30年7月豪雨により被災された皆さまに、心からお見舞い申し上げます。

7月5日からの豪雨による災害でお亡くなりになられた方々のご冥福を心よりお祈り申し上げますとともに、ご遺族の皆さまに心からお悔やみ申し上げます。

当院では、発災当日から被災された方々の診療や救急搬送の受け入れを開始しました。また、当院が持つDMATチームを被災地や県庁の調整本部に派遣するとともに、基幹災害拠点病院として、県外をはじめとする院外のDMATチームを多数受け入れ、DMATの活動拠点の役割を担いました。

7月17日には、被害の大きい熊野町の避難所に、広島JMATとして医療救護チームの派遣も行いました。



DMAT (Disaster Medical Assistance Team)
 災害急性期に活動できる機動性を持ったトレーニングを受けた医療チーム

JMAT (Japan Medical Association Team)
 日本医師会が被災地に派遣する災害医療チーム